



リビングラボによるイノベーション創出

国際社会経済研究所(NECグループ) 調査研究部主幹研究員

遊間 和子



生活の中で実践

リビングラボの機能は、前回紹介した認知症ハウスのように実験的につくられた場だけでなく、実際の生活の中で実践していくこともできる。オランダの「iZi財団」は、高齢者が自宅でできる様々なことが、外から見ただけで提供していくことを目指す非営利組織で、ハグ市内で「Gezo」高齢者の生活を支援する

デザインや機器が配慮されている。浴室は、転倒防止のための手すりだけでなく、座ってシャワーを使用できる椅子が壁に設置されており、手が伸ばしにくい窓のブラインドは、すべてリモコンで遠隔操作できるようにしている。



緊急通報装置ボタンが内蔵された居住者用スマホ

緊急通報装置、人間と技術の融合が図られた新しい住まいづくりにつながっている。安全・安心両立 このように、実際の利用者となる高齢者自身がPDCAサイクルに深く参画することに、より良い製品・サービスにつながっていく。iZi財団の共同住宅も、センサーなどの情報通信技術(ICT)が北欧デザインが北欧デザイン見の共有を進めている。国内での横のつながりを強化するとともに、海外とも知見を共有する機会を増やすことで、取り組みの活性化につなげていくべきであろう。

キッチンには、火災防止などのセンサーが取り付け、お湯の出る蛇口も、非常時には自動的に閉鎖される。また、緊急通報装置が取り付けられている。この共同住宅のもう一つの特徴が、外部向けにモデルルームの役割も果たすコミュニケーションルームにある。毎週金曜日には、ここに居住者たちが集まり、お茶とお菓子を食べながら、最も効果的に技術を模索する方法を探る。

この共同住宅を見学してきた人々、高齢者関係の研究者や企業関係者も一緒に集うことができる。居住者が、センサーなどの情報技術で支援された新しい暮らし方を実生活の中で試し、その結果をフィードバックすることで、最も効果的に技術を模索する方法を探る。

生活者視点の知見共有

「iZi財団」は、高齢者が自宅でできる様々なことが、外から見ただけで提供していくことを目指す非営利組織で、ハグ市内で「Gezo」高齢者の生活を支援する

日本でも、イノベーション創出につながるリビングラボ活用の重

(金曜日掲載)